

「ものぐさな村」のオメーに関する考察

金山 富美

I

『ボヴァリー夫人』において、主人公一家の悲劇が、妻であるエマの夢想癖を大きな前提条件としていることに異論はないであろう。しかし作家フロベールが本作品発表を機にその後長く書簡を交わし合うこととなるルロワイエ・ドゥ・シャントピー嬢の存在が証明するように、この田舎娘エマの境遇、憧れや幻想は決して特殊なものとはいえない。月並みな欲望を次第に狂気と呼ぶべきものへと変え、ヒロインを破滅へと導いた所以に思いを致すとき、我々はふと、巻き添えとなった彼女の夫シャルルの言葉——「運命の罪」¹⁾——を信ずる気持ちになる。この男は、実際、自らに降りかかる難局に何ら処することのできぬまま、あたかもロウソクの炎が尽きるように命の灯を消す。「解剖したが何もなかった」(p. 611)とわざわざ付け加えられているその死は、無常迅速そのものなのである。

シャルルが語った「運命」という言葉について、フロベールはきわめてアンビヴァレントな感情を抱いていたようだ。『ボヴァリー夫人』の語り手²⁾にそれを「仰々しい言葉 grand mot」と形容させ『紋切り型辞典』でも揶揄的口調で述べていながら³⁾、次の同時代小説『感情教育』最終章で作家は、今度は自分自身により近いと考えられる作中人物フレデリックとデローリエの二人の口から、奇妙な帽子に象徴される (p. 294) 愚鈍なシャルル同様に彼ら自身の失敗した人生が「偶然やその時々的情勢、生まれた時代」⁴⁾のせいだと語らせているのである。フロベール自身の運命観についてここで結論づけるのは控えたいが、彼の全作品の登場人物のうち「運命」を比較的冷静に受けとめているのがエマの愛人の一人ロドルフであったことを指摘しておく。「快樂が心を踏み荒らし一本の青草さえも生えなくなった」(p. 476) 冷淡さに比例して「どんな事柄に拘ろうと後ろへ

下がって観察する」「一段と優れた批判力をもつ」(p. 466) この男は、シャルルの弁に耳を傾けながら「その言葉をお人好しで滑稽で幾分卑屈である」と思い、同時に自らこそが「当の運命に導いた」(p. 610) のではないかと感じている。ロドルフにとって人生の道程は世俗のステージで一種導きそして導かれるものなので、彼は意識して自分を受動的な立場には置くことがない。そしてほとんど暗澹たる思い、情念、夢幻に心さいなまれることなく歩んでいく。『ボヴァリー夫人』には明確に意識するしないに拘らずこのような捉え方をする者と、他方脆弱あるいは単純な構造を与えられ(たがゆえに)、身に降りかかった幸不幸を「運命」に換言し、なす術も知らずその奔流に呑み込まれてしまう者の双方が対照的に描かれていることを思い起こしたい。読者に強く印象づけられるのはいうまでもなく後者である。一方、彼らを浮かび上がらせるためにフロベールが用いた有効な手段として、前者の働きがあると考えられる。その先頭を行くのは薬剤師オマーだ。

オマーは従来から「俗物の権化」として注目されてきたが、ビネーや商人ルウルゥらと同様に物語の環境としての副次的人物の一人と捉えられていることがほとんどである。しかし筆者は、環境というよりずっと積極的な、いわばボヴァリーの「運命」がそうなるのはやむを得なかったと思わせるようなある種の力学、物語をあの大団円へとしかるべく終結させるための大きな働きを、作家がオマーという登場人物に託したのだと考える。バルガス＝リョサは自ら一読者として『ボヴァリー夫人』への賛嘆を、それが与えてくれる「感傷癖」と「諧謔趣味」⁵⁾ だと述べたが、そうした効果はエマとシャルルに向けるオマーの関与の仕方と並行して醸し出されるものであろう。本稿では薬剤師オマーに焦点を絞り、物語進行におけるタクティックスとしてのこの人物の役割を明らかにし、そのために作家が彼をいかに構成し在らしめているかを考察していく。

II

サント＝ブーヴがいうように、確かにヴォピエサールの舞踏会での実体験はエマの魂に大きな爪痕を残した。⁶⁾ が、トストに戻ってから再び始まっ

た変哲のない日々の連続は、もしそれが続いていたならば、他の娘達と同様、彼女の夢想を日常性の中に埋め、失意の傷跡も意識下に押し込め、諦めさせ、次第に忘却の彼方へと消し去っていったことであろう。そしてまたシャルルは、向上しようという意志も機会もないままに、彼らしくしがらない免許医 officier de santé（本来ラ・リヴィエール博士《docteur》のように呼ばれない医者の一階層）の一生を送ることができただろう。しかしシャルルとエマはヨンヴィルにやって来てしまった。結果からすれば滅びゆくための引っ越しである。そこは彼らの終焉の地となった。

「トストを見捨てる」(p. 352)シャルルの決意には、四年間で得た顧客を失うのもいとわぬ妻への愛情と野心の欠如、同時にこの種の人物には稀有の実行力が示されている。が、ではその大英断の根拠は何であったかといえば、驚くことに、実は会ったこともない「当地の薬剤師」からの「まったく満足すべき」開業条件と環境 (p. 353) という返事なのだ。シャルルが無邪気に信頼を寄せた薬剤師の名は語り手からはっきりと明かされはしないが、第二部において夫妻の「金獅子」到着の場面⁷⁾ またその後シャルルのイポリットの鰐足手術失敗の事件等から、読者にはそれがオマーであると推察でき、村で薬剤師といえばこの男をおいて他にはいないことが知らされる。オマーのボヴァリーへの関わりは、まだその姿は見えないながら、第一部からすでに用意されていたわけなのである。

第二部冒頭に描かれるヨンヴィルは、「大海原より広大で、鮮紅色の雰囲気に包まれて」(p. 344) エマの脳裏に浮かぶ憧れのパリーに近づくどころか、トスト以上に閉じた空間である——特色のない風景、耕作するには費用ばかりかかる砂と小石ばかりのぼろ土、ルーアンへつながってはいるものの旧態依然とした村の性格を変えることなどとうていかなわぬ一本の「村道」、川岸に沿って長々と横たわる「ものぐさな村 *bourg paresseux*」(p. 355)。住人は土地の風土に似て、そこでの生活に安穩としている。トストではわずかながら出会えた「行きつまった」「見込みのない自分の前途を嘆く」エマの同類⁸⁾ さえもはや見られない。空気の良いところへの転地治療だったはずのものが、逆に、主人公の肉体と精神両面、さらに経済面における悪化をもたらすことになる。

フロベールはボヴァリーの人生に対するオマーの介入をこのようにして始め、主人公凋落の基盤づくりをする。その後の数々の出来事はオマーな

くしては起こらず、以下に挙げるように、各事件の幕開きには実際きわめて多く彼の影がちらついている。

①トストからヨンヴィルへの引越し

シャルルの自身喪失、ボヴァリー一家凋落の舞台への導入

②エマとレオンとの接近

薬剤師宅での夜の集まりには、そこに下宿する書記生レオンとボヴァリー夫婦しか参加せず、オマーとシャルルが疲れて寝入るといつも「他に聞く者もないだけ一層心楽しい」(p. 381) エマとレオンの会話が始まる。[③への導入]

③レオンを愛しているというエマの自覚

製麻工場への見学に皆を誘ったのは間違いなくオマーである。「下らないとしか表現しようのない」(p. 383) 場所でのオマーのはしゃぎぶりと夫シャルルの間の抜けた表情の隙間に、際立つレオンの美しさをエマは認める。

[貞操と恋愛願望に引き裂かれるエマの心 → 反抗と諦め → ④への導入。エマの濫費癖が始まる → ⑥への導入]

④エマの姦通の始まり

ロドルフから遠乗りに誘われ躊躇の様子を見せるエマをシャルルはオマーと見まがうほど断定的な口調、大袈裟なしぐさ——踵できりきり回りながら *en faisant une pirouette*⁹⁾ ——でたしなめ、妻に姦通の機会を与えてしまう。ロドルフに《docteur》と呼ばれて有頂天になり、事の次第を何ら考慮しなかったのである (p. 434)。この背景には「《docteur》という言葉を他人に向かっていうと、その荘重さが自分にもはねかえるような気がする」(p. 443) ので絶えずシャルルをこう呼びたがる薬剤師の姿が垣間見える。エマとロドルフの情事への出立に際し、薬剤師は仕事を中断して姿を見せ、《Bonne promenade!》と見送る。

[エマの不貞 → 後悔 → ⑤への導入]

⑤姦通一色となるエマの生活

ロドルフとの情事に疲れたエマの「シャルルへの心のよりを戻すための機会」(p. 450) をオマーが提供した——イポリットの鰐足手術。「この企てがもたらす利益を指を折って数えながら」オマーは、エマ

を通して、手術をするなど考えたこともなかった免許医をその気にさせる〔⑥への導入〕。もともと不可能であった手術。当然のごとくシャルルは失敗。

〔エマの貞操の完全なる崩壊へ→ロドルフとの関係、濫費への没入→⑥への導入〕

⑥多額の借金

シャルルは「オメーの店からとった」(p. 484) (実際は上記イポリットの手術の際にこの薬剤師自らがもち込んだ「まるで病院のように山と積み上げたガーゼの山 etc.」 p. 452) 薬剤の支払いが気がかりである。そこにエマと女中の散財が加わる。〔⑩, ⑪への導入〕

⑦エマにとっての二度目の姦通

オメーは「奥様」の精神的娯楽のために、エマをぜひ早いうちに芝居へ連れていくようシャルルに勧める (p. 492)。彼自身は「必ずしも居残らねばならぬ用事もないのに」(p. 493) 村を離れず、夫妻の出発を見送る (エマのロドルフとの姦通の始まり④と同様の構図)

— 《Bon voyage! Heureux mortels que vous êtes! [...] Vous allez faire florès à Rouen》。長い病床から回復後ようやく「諦め主義と天地万物に対する寛容」(p. 488) によって静かな生活を送られるようになっていたエマだが、劇場でレオンと再会するや、ロドルフによって魂につけられていた導火線がたちまちの内に発火する。

〔⑧への導入〕

⑧「嘘の塊りとなる」(p. 538) エマの生活

レオンとの逢瀬を楽しむためにエマがでっち上げたピアノの問題をオメーが後押しする。こうして彼女は「週に一度、恋人に会うために町を出る許しを自分の夫から得ることができた」(p. 528) が、ルウルゥに不倫の証拠を握られてさらに多額の借金を余儀なくされ、しまいには約束手形へ署名する。〔以下へ急速に展開〕

⑨エマとレオンの間に生じる亀裂

村を滅多に出ることのなかったオメーは青年時代を過ごしたルーアンを訪れ、レオンを連れ回す。よりによって木曜日、恋人達の逢引の日であった (pp. 545-547)。レオンの優柔不断を責めるエマ。このことが恋愛の「金箔が剥げ」る (p. 548) 発端となる。以後、うすらぎ

始めた情熱をかき立てるため、エマは狂気じみた贅沢に走る。「煩惱の犬」(p. 550)となるエマと、彼女に警戒心を抱き始めるレオン。

[以下へ急速に展開]

⑩エマの服毒

オマーはある日、自分の「聖堂」である蔵に入ろうとした薬局生ジュスタンに立腹のあまり、エマの目前、砒素がその「左隅の三つ目の棚上の『危険』とわざわざ書いてある青いガラス瓶の中にある」(p. 517)ことを口に出す。のちにエマは「よく覚えている通りに、まっすぐ第三番目の棚に進み寄って青い瓶をつかみ、栓を抜き、手を突っ込むと、白い粉を手一杯につかみ出して、そのまま食べ始め」ることになる(pp. 578-579)。

⑪破産と死

破産した医者シャルルを促して、オマーは「悲哀の象徴」である枝垂れ柳を添えた大きな墓を作ることに決めさせる。乏しい財産に見合わない途方もない出費。シャルルの死後、娘ベルトには、祖母のもとへ赴くための旅費しか残らない。

以上、我々は、ボヴァリーの転落の人生に対するオマーの強い関与について眺めてきた。しかし實際上、こうしたエピソードにおける頻出のほどにもかかわらず、小説を読み進む中で、読者はそれほど薬剤師のうごめきを意識していないのではなからうか。それほどに各出来事は自然な流れとして映る。いかほどか突飛な関わり方をしながらオマーの姿は読者の視界にはっきりととらえられることはなく、結果的にいつも事件に巻き込まれずに無傷なままの、騒々しい文字通り副次的人物という印象のみが残る。そしてエマやシャルルの愚かさ、危うさの方に目が向き、読者は、彼らのそうした特性こそが彼ら自身をしてしかるべき「運命」へと追い込んだのだ、というように思われるのである。

オマーとボヴァリーとの関係についてロットマンは次のように述べている。「シャルルの生涯の物語とも捉えることができる『ボヴァリー夫人』で […], この大志も才能もない免許医は […] オマーの絶え間ない忠告にもかかわらず失敗を繰り返す」¹⁰⁾ — シャルルの失敗した人生の傍らにオマーの存在があるという指摘には疑問の余地はないだろう。しかし筆者

は、シャルルがその凡庸さゆえに、あるいはエマがその夢想癖の強さゆえにオマーの「良識」を味方にしても失敗の人生から救われなかったのごとき運命論的解釈をここでするものではない。なぜならば数々の例は、オマーこそがシャルルの資質を負う方向へと向かわせるきっかけとなっていることを物語っているのではないか。また、この人物のエマに対する働きかけは、彼女が夢想、空想の世界から現実と墮落の道へと踏み込む道筋にまったく照応しているのだから。

ボヴェリー夫人の夢想癖を一家の悲劇へと向かわせる役割は他ならぬオマーの手中にあり、フロベールがこの薬剤師の存在を小説中で一種の拍車として作用させていることは確かであろう。ごく当たり前の資質をもつ主人公達のわずかな自尊心や自己の存在としての目覚めに巧みに滑り込み、彼らを現実的視点から遠ざけ、また卑小な力には不相応な舞台へと誘うのは他でもない、薬剤師の括弧付きの忠告なのである。

とはいえ、オマーの姿が読者の眼に映ってはいるものの突出せず、まるで黒子のようなのはなぜなのか。次に、作家がオマーをいかなる人物として構築しているかに注目する。

Ⅲ

オマーのボヴェリーに対する非常に細やかな「配慮」は、彼のある計画に基づくものであった。恩義を売っておけば、我が身の秘密が万——知られても口外されないだろうというのだ (p. 370)。薬学と医学とが分離され、「免状なきものは医術を行なうべからず」と定められた革命歴第十一年風月十九日付法律第一条の違反によって身も心も凍るような経験をしたのにもかかわらず、また自らがシャルルを村に呼び込んでおきながら、オマーは禁じられた医療行為を再び行ない、その越権によりふところを潤している。むろんそのために、新任の医者のもとには思うように患者が来てはくれない。

オマーは実際非常に怪しい人物である。まず、ヨンヴィルの医者としてシャルルの前任者であったヤノダのエピソードひとつをとってみても、オマーをいぶかしく思わせるに十分である。この「哀れなヤノダ」は「常軌

を逸した贅沢」のため (p. 366), ヨンヴィルを逃げるように「立ち退いた décamper」(p. 353) — この情報は薬剤師の口を通して聞かされる。また酔いに任せてのオメーの告白 (p. 547) — 「左前であった」以前の状況から「際だって人目を引く」薬局への発展ぶり —, そしてオメーの医者住まいや暮らしぶりに対する精通ぶりに、この薬剤師への疑惑は深まる。ヤノダの破綻の原因には、おそらく薬剤師が深く絡んでいたのではなからうか。

さらにジュスタンへのオメーの尋常ならざる怒りの場面（これは自殺の手段をエマに示唆する重要な展開部分でもある。前出⑩参照）もまた、この人物の二つの顔を明確に伝え、策動家としての姿を確信させるものとなっている。

Enfin, si la pharmacie, ouverte à tout venant, était l'endroit où il étalait son orgueil, le capharnaüm était le refuge où, se concentrant égoïstement, Homais se délectait dans l'exercice de ses prédilections [...] (p. 517)

お人好しのシャルルも無論、ヤノダの二の舞を演じることになる。作家は最終章に、オメーの医者に対する優位がその後も繰り返され、「哀れなシャルル」の死後、ヨンヴィルに開業した三人の医者が皆次々と「こてんぱんにやっつけ battre en brèche」(p. 611) られてしまうと付け加えている。

オメーの行動は、当時のフランスにおける薬学および医学事情¹¹⁾を抜きにしては考えられない。前出の法律が一旦定められると、結果的に特権的な地位を与えられた医者と違って、薬剤師は職域を狭められた上に以前にもまして多くの競争相手をもつこととなった。物語中オメーが懸念している「ねたみ深い同業者」には、彼の店の自家製品として列挙される商品から推察される通り、乾物屋あるいは砂糖菓子商らまでが含まれていた。¹²⁾このように当時はまだ近縁関係にあった職業の者達が混然として同種の商いに群がっていたため、実際薬剤師は生活の維持に躍起にならざるをえなかった。以前には投薬の際当たり前のように行なっていた治療を彼らは当然手放したがらず、職権を超える行為は事実少なからずあった。それは彼らなりに生き延びていくための手段、知恵なのだった。

オメーの寄って立つところを眺めると、自らの生業を医者なくしては成立しえぬものと理解しながら、医者を利用し、その領域に入り込んで利益

を上げようとする卑しくも堂々たる「薬剤師ぶり」が理解されよう。トストを去るか否かに思案するシャルルに色よい返事を送った親切なオメーの姿は、その裏に、ヤノダに勝利した後、金獅子で次の獲物の到来を待ちかまえる黒い影を伴っている。ただし、それは商人ルウルウのようなあからさまの悪知恵なのではなく、生活人の「隠された悪意」といったものである。レオンに別れを告げる際に泣きじゃくり気の良さを見せたかと思うと、次の瞬間には自ら友人と呼ぶこの若者が都会で出会う危険や放蕩ぶりを他人事のように気楽に語り始める (pp. 400-401) 姿勢、また失神したエマを気遣うシャルルの傍らにあって「奥様」の食養生を説いている「罪のない得意の微笑」(p. 482)、あるいはまた瀕死のエマと破産をかかえこんだシャルルの気の毒さを思いつつ立派なアンフィトリヨンぶりを気取れる嬉しさに頬をゆるませている姿 (p. 586) 等もまた、オメーという人物にフロベールが与えた「生活人」という特性を示す。この点でオメーは、フロベールが彼の生業を呼んでいる通り《apothicaire》なのであって、いわゆる《pharmacien》ではない。¹³⁾ 加えて、「汚くて躰の悪い」(p. 369) 四人の子供と「ドレスを着ている以外に女らしさをもっていようとは思われない」「羊のようにおとなしい」(p. 378) 妻¹⁴⁾ を愛し、彼らを路頭に迷わせずに家業に専念する「よい人々」¹⁵⁾ の一人である彼のイメージは、同じ環境¹⁶⁾ にありうる読者の同情 (いささかの軽蔑や苦み) を誘いもする。ボヴァリーからつかず離れず不吉なものを呼び込むオメーが読者の敵意や警戒を呼び覚まさないのは、このように「現実にしかりと根を下ろした愛すべきブルジョワである」という彼の環境が大きく作用している。通常は蔑んでいるのにもかかわらず、エマが姦通に疲れてはて、財産の差し押さえを知って「得たいの知れない深淵に落ちていくような」気がしたときに「好々爺オメーの姿を見かけて喜びにも近いものを感じた」(p. 546) 場面には、こうした感覚に近いものが指摘されよう。

エマをシャルルに対するその破壊力から「宿命の女 *femme fatale*」と呼ぶことができるとすれば、オメーはボヴァリー達にとって、『紋切り型辞典』にフロベール自身が記している「宿命の男 *homme fatal*」¹⁷⁾ の名にふさわしい。この目立たぬ、けれども『ボヴァリー夫人』の物語を動かすオメーの存在を、作家フロベールはなにげなく「金獅子」の女将に指摘させている——「彼こそ<すべての原因>なのだ *Il était cause de tout*」¹⁸⁾

と。我々はこの真実が小説の深いところで最後まで流れていることを意識しなければならない。

IV

物語の拍車であるオメーの大きな特性としては、また、ボヴァリーを誘惑する耳打ちや提言、雄弁も挙げられる。「内なる言語の不在」との表現も可能だろう——フロベールはあの自由間接文体の駆使により、読者にエマあるいはシャルルの真摯な眼差しを我々自身のものにして事象や幻想を見たりする機会を与えてくれるが、オメーの場合そうしたことは皆無に等しい。心を別の世界に遣って苦悶する薬剤師の姿などは、かつて法律違反によって戒告を受けたことが語られる場面の一度きりしかなく、実際この人物にとって「思い出すこと」「幻を見ること」とは、「精神が弱った」女々しく情けない状態であるに過ぎない。¹⁹⁾ オメーは、言葉をあたり一面に乱射する。

彼の言葉の特徴を具体的にいえば、まず断定がある。人や物を前にそのありさまを語るとき、オメーの唇に上るのは《C'est》、《Voilà》また《Il s'agit de》等である。

— Ce ne sont pas les civilités qui lui useront la langue! (p. 360) /
C'est qu'il est fort probable [...]. (p. 403) /
Voilà [...] une affection scrofuleuse! (p. 564) / etc. —

ある場合はいわずもがなのことを、あるときはあたかも「初めて見たような顔で」(p. 564) 必要以上の驚きの表情を込め、オメーはいかなる躊躇もなく定義づける。その唐突で偏向した定義のあとには、格言、常套句（当然ながら、フロベールが後に『紋切り型辞典』に挙げる文句には、『ボヴァリー』で薬剤師の用いていたものが少なくない）や哲学者の名、またラテン語等が続き、能弁を飾り立てる。それはまるで彼の意見を裏づけ、証明するものでもあるかのように併する。

— Vous avez tort! Il ne faut jamais laisser en friche les facultés de la nature. [...] C'est une idée de Rousseau, [...]. (p. 528) / Mais il faut pour cela suer ferme sur l'aviron, et acquérir, comme on dit,

du cal aux mains. *Fabricando fit faber, age quod agis.* (p. 518)
 /etc. —

オメーはまた、単語の羅列、繰り返しによって、たった一つの些細な仮定を、実際には到達などともおぼつかないような華やかな現実性に描き上げてしまう。そこに挟み込まれるのは《voyez-vous》《vous savez》《songez》《notez》また《certainement》《par exemple》等の語句で、話し手がすがっている信憑性を聞き手に押しつけ、あたかも聞き手の了解を得たうえで話をすすめているかのように、そのまま否定なく自分の側に引き込む。オメーの言葉は対話の否定でもある。それはまた、きわめて執拗な誘惑でもある。反語、あるいは仮定法によって自分自身を卑しめ、同時に相手のもつ可能性を暗示する台詞を吐けば、すでにそこは商人であるオメーの独擅場である——彼はこうしてシャルルの医者としての信用を貶め、エマを幻滅させた(Ⅱのエピソード⑤参照)。

— Car, disait-il à Emma, que risque-t-on ? Examinez [...] succès presque certain, soulagement et embellissement du malade, célébrité vite acquise à l'opérateur. Pourquoi votre mari, par exemple, ne voudrait-il pas débarrasser ce pauvre Hippolyte [...] ? Eh! mon Dieu! un article circule..., on en parle..., cela finit par faire la boule de neige! Et qui sait? qui sait? (p. 450) / Enfin, croyez-moi, conduisez Madame au spectacle, ne serait-ce que pour faire une fois dans votre vie enrager un de ces corbeaux-là, saprelotte! Si quelqu'un pouvait me remplacer, je vous accompagnerais moi-même. (p. 492) / etc. —

以上の引用に見られる《on》にも留意されたい——「オメーは《on》の信徒である」²⁰ それは聞き手の側からすれば客観性であり、他方話す側にとっては、対象から距離をとっての安全な位置を表わす。薬剤師は自らの言説の責任を《on》の陰に隠蔽し、その言葉に誘われた者達の「挙げ句の果て」には一切関与しないであろう。

さらに普段用いる「乾物屋の用語」²¹ (goberger, fichu âne, etc.) に対して、オメーがボヴァリーの説得や誘惑に用いるものの中には科学者ぶった誇らしげな顔²² で語る数々の学術用語 (acide oxalique, stréphopode, etc.) が目につく。オメーが用いるこれら二種類の用語の混在はそのまま

人間の二面性に通ずるものともいえるが（前出Ⅲの引用——薬局と蔵のエピソード——参照）、いかにも客観性と中立性に裏打ちされたかのようなそれらの言葉は、商業主義のジャーナリズムとアカデミズムの特徴から成るキマイラである。

オメーは自分の文章を「よく練って、移り変わりもなだらかな、品も調子もよい」（p. 519）ように整えるが、イポリットの罅足手術、エマの失神に対する見立て、また彼女の死をその父ルオーに伝える手紙（「何のことやら見当のつかないものだった」p. 597）等のエピソードが明らかに示すように、言葉をいくら多く連ねても、いや連ねればそれだけ一層、そこで語られる事象は無意味へと変貌し、真理から遠ざかっていく。モンテーニュなら、この薬剤師をレトリックの専門家と呼んだに違いない——「レトリックの専門家達は […] 小さな足に大きな靴を器用にはかせる靴屋と同じである。彼らより、まだしも女達に仮面をかぶせ化粧をさせる連中の方が害が少ない。女達をその生まれついたままの姿で見なくとも大した損にはならぬが、レトリックの専門家達ときたら我々の目ではなく判断力をたぶらかし、物事の本質まで変容させてしまう」。²³⁾ 薬剤師の冗舌はそれをまともに受ける者を眩惑させる魔法であり（エマは薬剤師のジュスタンへの罵りを耳にしながらか「何の用事で呼ばれたのかを聞くのを忘れていた」p. 518 / レオンはエマのもとへすぐに戻る約束をしたのにもかかわらず「しきりに同じ台詞を繰り返して誘いかける薬剤師の魔法にかかったようにたたずむ」p. 548）、その言葉はまさに「ケンケ燈に照らされて派手な色彩を地上に長々と引く」店先に飾られた二色のガラス玉さながらである。

Mais ce qui attire le plus les yeux, c'est, en face de l'auberge du *Lion d'or*, la pharmacie de M. Homais! Le soir, principalement, quand son quinquet est allumé et que les boccas rouges et verts qui embellissent sa devanture allongent au loin, sur le sol, leurs deux clartés de couleur, alors, à travers elles, comme dans des feux de Bengale, s'entrevoit l'ombre du pharmacien accoudé sur son pupitre. (p. 356)

一方彼自身の姿は、といえば、それは上記の描写そのままの、奥に「ほの見える影」にすぎないのである。

考えてみれば「生活人」オメーといっても、職業と家族によって影絵の

ごとく提出され、そこから読者が受け取るひとつのイメージにすぎないのではないか。彼の言葉にしても、内実空虚な偽りのパロールであるとは、見てきた通りである。ここで我々は、オマーを次のように形容することも可能ではなからうか——彼にはシルエットはあるが姿そのものがない、と。あれほど頻繁に登場するにもかかわらず、オマーには魂をもつ人としての「顔」がない。²⁴⁾

V

フロベールは終生「叙情あり、起伏あり、乱れありといった、まったく気ままに振舞える主題」²⁵⁾に溢れる古代の歴史物に心を強く引かれていた。けれども『感情教育』の背景となっているような歴史の動きの射程距離にはなく、『聖アントワヌの誘惑』の苦行僧に見られるような信仰、魂のすさまじい相克もないヨンヴィル村を舞台とした同時代小説には、いかにして動きをもたせられるのか。その解答として、我々はそこで「歴史」を司っていたのがオマーという「宿命の男」であったということを確認しよう。エマの人生が急速に転落していく時点（Ⅱで述べたオマーのボヴァリーへの関与⑧）とオマーが「パリ風にかぶれ」新しい言葉を次々と覚えて彼の貯えとしていく（p. 545）時点は一致する。フロベールは彼を「知識である」と名乗り聖アントワヌの素朴な信仰をゆるがす悪魔、魂を誘惑する死神、淫乱の神にも似た働きをさせた。エマとシャルルという凡庸なボヴァリーの物語は、農事共進会（村人達の前に居並ぶお歴々の中にはオマーがいる）の演説をわけのわからないまま「まるで飲み込もうとでもするかのように口をあんぐり開けて」（p. 424）聞いている大衆と同じように、彼らがオマーの「忠告」を喉に流し入れ、自分達の欲望に溶かし込んでしまったことで進行していったのだ。シャルルの少年時代の記述からエマへと受け継がれた物語が、田舎の一薬剤師の華々しい栄光で幕を閉じられるのは、もはや何ら不思議なことではない。

エマとシャルルが消え行くさなか、オマーは事象を彼のレトリックで切り取るばかりか作り話をこしらえて盲を追放、そこで勢いにのり、ジャーナリズムの世界で危険視されるほどの力を得る。と、次には新発見と歩調

を合わせて事業に手を染め、書物を著わし、芸術の世界にまで進出する。次々と成功を収め、その社会的地位は上昇していく。時代の流れにのって。いや、「顔のないオマー」にフロベールは時代を映し出しており、以下の描写を見るならば、オマーを「時代そのもの」と呼んでも構わないのではないかとさえ思われる。

Il s'éprit d'enthousiasme pour les chaînes hydro-électriques Pulvermacher; Il en portait une lui-même; et, le soir, quand il retirait son gilet de flanelle, madame Homais restait tout éblouie devant la spirale d'or sous laquelle il disparaissait, et sentait redoubler ses ardeurs pour cet homme plus garrotté qu'un Scythe et splendide comme un mage. (p. 607)

ここにはつまらぬ代物が万人の賞賛するものへと変貌していくさまが見出される。また(村人の中でただ一人、最後までエマの悪い噂を信じなかったもっとも善良なる!) オマー夫人の夫の姿への感嘆ぶりには、無邪気な大衆の「進歩」に対する眩惑が表現されている。輝かしい黄金色の彫像と化したオマーの威光は、トストの引っ越しの際に「粉々に砕け散った石膏の和尚像」(p. 371) のようにもろくはない。以前は彼の「口悪さと政治的意見にへきえきして足を遠のいていた」(p. 380) 人々も今は皆こぞって「彼を擁護している」(p. 611)。フロベールが切望する「精神的な進歩」は遠くに消え去り(この時代は、知的選良と大衆とのきわめて急激な乖離が特徴である)、オマーが吹き込む「科学信奉」「物質的進歩礼賛」「合理主義」つまり「ペテン」の喧噪が支配する世界へと進む人間達の足音が高らかに響渡る。ブルニジャン司祭との争いにオマーが勝利したエピソードが語るように、オマーが体現するものは古い権威であった宗教を追いやり、自らを「新しい宗教」としていくことだろう。

「ものぐさな村」ヨンヴィル・ラベイはある意味で世界の縮図であって、そこを基盤に支配者となり、レジオン・ドヌール勲章を我が物とするオマーという薬剤師には、フロベールが大衆に観る無知や欲望を集結した「マスというもの」も表現されている。それは、幻想や情念の世界を理解しうる「人間的人間 être humain」の手を離れていつしか独り歩きをし、各人間を世俗的な(裕)福の欲望へと魅せ、魂まで売り渡させてしまう「文明社会」なのでもあり、エマやシャルルを排除する時代の潮流なのだ。この意

味からするならば、『ボヴァリー夫人』には「近代のファウスト伝説」（「ファウスト」という言葉はラテン語 *faustus* — 「幸福な」を語源とする）の性格も指摘されよう。²⁶⁾ その伝説に欠くべからざる主要人物が薬剤師オマーであることは、もはや言うまでもない。

註

- 1) Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, *Flaubert Œuvres I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1977, p. 610. 以下, *Madame Bovary* (*M. B.* と略記) からの引用はすべてこの版により, 本文中括弧内の数字は出典ページを示す。
- 2) 『ボヴァリー夫人』の語り手は不可思議である。その視点は変化し, 一つに確定ができない。Cf. 拙稿「『ボヴァリー夫人』 — その表現者の個性としての描写 (1)」(『周辺』12号, 1993. 10, pp. 12-19.)。
- 3) Cf. Fatalité の項: 《Mot exclusivement romantique. Homme fatal se dit de celui qui a le mauvais œil》, Gustave Flaubert, *Dictionnaire des Idées reçues*, Audier, Editions Montaigne, 1980, p. 71.
- 4) Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, *Flaubert Œuvres II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1979, p. 455.
- 5) リョサによれば読者が小説に望む欲望はこの二つであり, 彼は『ボヴァリー』こそそれをたっぷりと満足させてくれる作品であると述べている。M. バルガス=リョサ『果てしなき饗宴 — フロベールと「ボヴァリー夫人」』筑摩書房(筑摩叢書 319)工藤庸子訳。p. 19.
- 6) Cf. Sainte-Beuve, *Variété, Littérature : Madame Bovary*, - *Le Moniteur*, 4 mai 1857, reproduit *Causerie du Lundi*, XIII, Paris [『フロベール全集』第9巻, 筑摩書房, 1976]
- 7) 《Homais se présente; il [...] dit qu'il était charmé d'avoir pu leur rendre quelque service, et ajouta d'un air cordial qu'il avait osé s'inviter lui-même, sa femme, d'ailleurs, était absente》*M. B.*, p. 363.
- 8) トストの家の窓から見える散髪屋の主人: 《Lui aussi, le perruquier, il se lamentait de sa vocation arrêtée, de son avenir perdu, et,

rêvant quelque boutique dans une grand ville, comme à Rouen, [...] Lorsque madame Bovary levait les yeux, elle le voyait toujours là, comme une sentinelle en faction, avec son bonnet grec sur l'oreille et sa veste de lasting》*Ibid.*, p. 350.

- 9) 《Enfin, s'écriait-il (=Homais), en faisant une pirouette, quand ce ne serait que de me signaler aux incendies!》, *M. B.*, p. 608.
- 10) Herbert Lottman, *Gustave Flaubert*, Fayard, 1989, p. 165.
- 11) Cf. René Fabre et Georges Dillemann, *Histoire de la Pharmacie*, Collection "Que sais-je?", Presses Universitaires de France, 1963.
- 12) 《Il (=Homais) donna pour cadeaux tous produits de son établissement, à savoir : six boîtes de jujubes, un bocal entier de racahout, trois coffins de pâte à la guimauve, et, de plus, six bâtons de sucre candi qu'il avait retrouvés dans un placard》, *M. B.*, p. 373.

薬剤師の店ではその他、コーヒーも扱えば、チョコレート（菓と食物の両方の働きをもつもの《chocolat de santé》）も販売されていた。オメーの職業である薬剤師（pharmacienあるいはapothicaire）とépicier（乾物屋あるいは香料商）、confiseur（砂糖菓子商）の職の分化は1742年に始まったに過ぎず（Cf. *Larousse Gastronomique*, Librairie Larousse, 1984, pp. 402-403）、彼らの対象となる商品は実際その後も長い間重複するという状況があった。

- 13) オメーが看板に掲げ、また自らを名乗るのは《pharmacien》であるが、フロベールは地の文でしばしば彼を《apothicaire》と記している。前者は「菓」を意味するギリシャ語《pharmakon》に、後者は「店」の意の《apothêkê》に由来している。従って《apothicaire》という言い方は市井の人「商人」の意味合いが強い。
- 14) オメーの子供には名前があるが、オメー夫人には名前がない。彼女はだらしない、しかし心優しい母であり妻であり民衆である。この夫人はオメーの免罪符のような働きをしており、彼の悪意が醸し出す印象を和らげている。
- 15) オメーがエマの出産祝いの席で歌うベランジェ作『よい人々の神 *Le Dieu des bonnes gens*』より。「その神様に向かって、貧しくとも満

足して、何も求めず、私は礼拝します。この世界の仕掛けを見ていると、悪が目につくけれど、私は善しか愛しません。でも快樂は私に教えてくれます。知性あふれる天国が存在するというを。グラス片手に、私は陽気に、よい人々の神に心を捧げます」 Cf. J. Touchard, *La Gloire de Béranger*, Librairie Armand Colin, 1968.

林田遼右『ベランジェという詩人がいた』新潮社

- 16) オメーの家庭生活の描写とエマのそれとの違いは、前者に日常・実用性が描かれているのに対し、後者が倦怠や嘔吐感といった当人物の心象風景であるということである (Cf. 拙稿『『ボヴァリー夫人』における登場人物の食の情景』島根大学法文学部紀要文学科編第23号)。また、*Histoire d'un jeune homme* を副題とする『感情教育』の草稿に、作家自身が《*Histoire d'un jeune hommet*》と記していることも留意されたい (Cf. Maurice Bardèche, *L'Œuvre de Flaubert*, Les Sept Couleurs, 1974, p. 297)。想像と愛の夢の世界に身を没入する今日の若者も、ほどなく現実が目覚め、そこで必要な実用性と生活感を身につける明日のオメーなのである。
- 17) Cf. 註3)
- 18) 《L'apothicaire s'indigna contre ce qu'il appelait les manœuvres du prêtre [...] et il répétait à madame Lefrançois [...] Mais la bonne femme ne voulut plus l'entendre. Il était *cause de tout*》, *M. B.*, p. 457.
- 19) 《Les oreilles du pharmacien lui tintèrent à croire qu'il allait tomber d'un coup de sang; il entrevit des culs de basse-fosse, sa famille en pleurs, la pharmacie vendue, tous les bœux disséminés; et il fut obligé d'entrer dans un café prendre un verre de rhum avec de l'eau de Seltz, pour se remettre les esprits》, *Ibid.*, p. 370. 決定稿以前、フロベールはオメーをエマにより近い人間として想定していたこともあったが、それをとりやめている。
Cf. *Scénario L X IX-Folio 39 recto in Œuvres Complètes de Gustave Flaubert*, tome I, Club de l'Honnête homme, Paris, 1971, p. 549. ここでもまた、副次的な人物とはいえオメーという登場人物が特殊であること、その役割の重要性が伺い知れる。

- 20) *Flaubert et le Pignouf*, L'Imaginaire du Texte, P. U. V., p. 23.
- 21) 「低劣なことばかりに気を遣い商人のような会話をしていると […] まるで乾物屋になったような気持ちだ」G. Flaubert, *Lettre à Mme Brainne*, 10–11 décembre 1878. ちなみに当時, 乾物屋 épicier は庶民(知的選良からすれば俗人)そのものを象徴していた。
- 22) La Bédollière, *Les Français peints par eux-mêmes* の詳細な検討から, デュフルはオメーの言葉, 人物設定が科学者 Lavoisier (1743–1794) に多く負っていることを解明している。 *Flaubert et le Pignouf*, pp. 36–45.
- 23) Montaigne, 《*De la Vanité des Paroles*》, *Essais, Tome I*, Classiques Garnier, 1974, p. 338.
- 24) デュフルは「オメーという人物からは, ただ声だけが聞こえる」と述べている。Philippe Dufour, *Flaubert et le Pignouf*, p. 16.
- 25) G. Flaubert, *Lettre à Louise Colet*, 16 janvier 1852.
- 26) フロベールは14歳の頃, すでにファウストについての小論を書いている。 Cf. Antoine Naaman, *Les Débuts de Gustave Flaubert et sa Technique de la Description*, Naaman Dilif, Editions Naaman, 1982, p. 32.